

# 東日本 — 阪 神

## 二つの被災地 つなぐ女子会

16日、気仙沼で

阪神大震災の翌未明に長男を出産した神戸市東灘区の会社社長・田中成美さん(52)が16日、東日本大震災の被災地・宮城県気仙沼市で「女子会」を開く。混乱の中での出産や、その後の育児、仕事の苦勞を本音で語り合う。「女性同士で一緒に泣いたり、笑ったりする時間を共有して絆を深めたい」と願っている。

### 仕事・育児語り合う

1995年1月17日早朝。臨月だった田中さんは、夫と4歳の長女と寝ていた神戸市灘区のマンションで、大きな揺れを感じた。



「気軽におしゃべりしながら打ち解けたい」と女子会を計画する田中さん(神戸市東灘区で)＝耕田直也撮影

運転。近くの病院はけが人の対応に追われており、約20分離れた別の病院に向かった。

大渋滞に巻き込まれ、運転席のシートが羊水でぬれた。「おなかの子が危ない。もうこれ以上運転できない」。車を乗り捨て、信号待ちしていた乗用車に乗せてもらった。がれきの街を抜けて、病院に着いたのが翌午前2時。30分後、男の子を出産した。涙が止まらなかつた。「地震に負けず、復興を担ってほしい」と、「大地」と名付けた。

その後、不況で仕事を失った夫と関係がぎくしゃくして離婚。子ども2人を引き取り、スーパーのレジ打ちやスナックのアルバイトなどをしながら、パソコン技術を学び、2009年9月にホームペーシ制作会社を起業した。「あの日」から14年がたつ

ていた。東日本大震災の被災地とのつながりを持ったのは、12年2月。会社近くの岡本商店街に、気仙沼市の干物などを取り扱うアンテナショップができた。「少しでも役に立てれば」と時々店を手伝い、乾物を納入していた同市の小野寺由美子さん(48)らと親しくなった。

小野寺さんは乾物店と築4年の自宅を津波に流された。夫と3人の子どもは無事で、今は家族とアパートで暮らし、仮設店舗で乾物店を営む。だが、売り上げは2〜3割落ちたまま。「どれだけ頑張っても復興を実感できない」。落ち込んでいた頃に田中さんを知り、「やる気を持ち続ければ報われるときが来る。被災地の多くの女性にも伝え、神戸と姉妹のような縁を結びたい」と女子会開催を持ちかけた。

当日は、田中さんと友人ら約10人が気仙沼市を訪ね、現地の10人余りと語り合う。田中さんは離婚後、仕事に明け暮れ、2人の子どものから「どうして遊んでくれないの」と迫られ、悩んだ。「素直に『しんどい』と言えば、気持ちが悪くなったはず。本音を吐き出してもらい、一緒に復興を考えたい」。女子会は毎年1回、続けるつもりだ。

### 淀川 初期はピンク色

米航空宇宙局(SA)提供の想像図。在の天の鏡の観測は14日、た、の想像図SA提供在の天の

### 射殺 ナンパイ

東京都1995年11月15日、射殺事件で、

正義の国を可也

議は自身が経営する貿易会社「スカイウェイ産業イン」で、厳罰のり、刑去